

魅惑の人

水沼文三小説選集

目次

魅惑の人	3
浮遊する言の葉たち	49
―考える人、風子―	
男性感知システム	103
遠い記憶	139

魅惑の人

洋画家湯川雄一は七月で四十歳になった。画業二十年の生涯のなかで（こんなにも魅力的な女性にめぐり会うとは……）ほとんど衝撃に近いできごとがあつたのだ。

ひとりぐらしの彼の家は森の中。ある晴れた十月の初旬、紅色に染まるカエデの群れのなかを歩いて、女の子を連れた二十三歳くらいの女性に出会った。

「かわいらしい、おいくつですか」

「三歳です……クリの実をひろいに来たのですが、なかなか見つからなくて……」

「ご案内しましょう。右の方、百メートル向こうにかつ色の実をつけたクリの木がたくさんありますよ。あれはみな自然林のクリなんですよ」

淡いグリーン色のワンピース姿の女性は子供の手をひいて雄一のうしろについてくる。落ち葉をふむ足音がたえ間なく聞こえてくる。

間もなく右の方に実をいっぱいつけたクリの木々が見えてきた。

「うわ、見事なクリの実」

ここ二、三日の風で、クリのかさが割れて、どこもかしこもうす茶色の実ものぞかせている。

「いっぱい落ちています。ミキちゃんよく見なさい。ほらあんなにも……」と指をさす。

ピンクのリボンをつけた女の子は五メートル斜め上の枝を見上げて、今にも落ちそうな実を見

つめている。

雄一はかたわらに落ちている五メートルばかりの木の棒でそこらの枝をたたくと、とめどもなく落ちてくる。

母の名は川田紀子。母と子は駆けよって、つやつやした実をひろいあげ、透明なビニールの袋に入れていく。

雄一も手渡された袋に五十個くらいつめこんだ。いずれも直径三センチくらいの新鮮なものばかり。

一時間後、三人は幅二メートルばかりの山道をひき返した。いつの間にか丘陵南向きにある洋風二階のクリーム色の住宅にたどり着いた。紀子の家である。

「お寄りください」

玄関わきの応接間に案内する。

竹箆にこぶりのミカンを二十個ばかりもりつけて置く。

椅子に座ったミキは一個とりあげ、器用に手を動かして皮をむいていく。「すばやい」感心すると、母親はうれしそうにその手もとを見つめている。

湯川家の西方に平らな野原がひろがっている。きょうも晴れ。近くの緑の芝生が温かい午後の日さらされ、遠方にはかすかに雪を抱いた富士山が浮かんで見える。

門前から二百メートルばかり、ゆるやかなスロープの道路をゆけば幅五メートルほどの小川が南へ流れている。

午後一時ごろ、この川に沿った小路を散歩する。白いコンクリート橋をグリーンの乳母車が雄一の方に近付いてくる。この前の女性の姿が見える。白いブラウス、ピンクのスカートのよそおいであった。

「この間はありがとうございました。早速クリをゆでて、いただきました」

かっ色のクリの皮をむいて、スプーンでわずかずすくって子供の口元に近づけると、ゆっくり口をあけて含む。

黄色の実の甘みをおびている。スプーンでまた4分の1くらいすくい、口元に近づける。かすかに香ばしいにおいが漂う。それを口にいれると、吸いこむように口を動かす。彼にその動作を細かく説明している。

雄一らが立ち止まっている周りは二ヘクタールほどの松林がひろがっている。その南端に、洋風のクリーム色セラミックス製のしような洒な建物が見えかくれする。先日訪れた紀子の家である。

「お寄りになって下さい」

先に立つて歩をすすめる。この前入った玄関わきの洋間の次の間に案内した。ベージュ色のソファにすわる。クリーム色のカーテン、白い壁中央にモネの「春の野原」がかかっている。

「きれいなお家にお住まいになっていますね」

「二年前建てたんですの」

彼女はブルーのスリッパをはいて近寄り、銀のお盆にのせたコーヒーカップとカステラ三片の皿を雄一の前に並べる。

「ご主人はご出勤ですか」

「ことしの五月からブリュッセルに住んでおりますの」商事会社支店勤務で二年の予定、という。コーヒーをひと口含んで、うすいカーテンを通した窓の向こうを見ると、クヌギ、ナラ林がひろがっているのが見える。

「きれいな眺めですね」

白いレースをしたテーブルに淡いブルーのコーヒーカップが置かれている。紀子は小さい

ポットからかつ色のコーヒーをゆつくり注ぐ。

ミキは藤の子供用いすに静かに座っている。プリンが入っている小さいカップを手渡した。緑色のスプーンを動かして、小片をゆつくり近付け、口に含んでいる。

「最近、よく食べるようになって、とくにプリンが好みなんですのうれしそうであつた。」

それから紀子が語つたブリュッセルの都市名を思い浮かべた。

「ブリュッセルにお住まいということ……すばらしいところですね」

「……ことしは、十二月中旬に一時帰国の予定ですよ」

雄一も五年前、ベルギー、オランダ方面へスケッチ旅行した。

ブリュッセルは十六世紀の面影が残る街で、グランプラスなど世界遺産があり、小パリと呼ばれる。

「ことしの五月、私も子供を連れてブリュッセルを訪ねました。夜景はともきれい。次の日はブリュージュを訪れ、主人と三人で運河を小型船でクルージングしました」

「私もあそこを訪ねました。十六世紀のクリーム色の鐘楼建物群の中を運河が流れ、乗船する



旅行者から歓声があがる。遠くにたたずむ教会を眺め背後の修道院もふり返りました」

「ブリュージュは橋の街である。五百メートル間隔に白い石の橋が架かり、船はその下を次々とくぐっていく。

橋の上の人々、運河沿いの歩行者がにこやかに手を振っている。船上の人々も、それにこたえて手をふっている。

街全体がよく整い、チリひとつない。きれいな街ブリュージュ。橋の町ブリュージュ、カリヨンの音がひびく。時の鐘だ。

ヨーロッパ各国から集まった人々。あすどこへ行くのか、目の前の観光の人々、みんなふたたび会うことはない。……これが人生だ。

彼女の差し出すコーヒークップを受けとり、口元に近づける。ブルーマウンティンの匂いが伝わってくる。

「おいしいです。紀子さん」

「よかったわ」

彼女もかすかにたちのぼる湯気の液体を口に含んでいる。

ミキはプリンを食べ終わり、スプーンを受け皿においた。雄一は立ち上がり、ミキを抱きあげ